

Sun Server X4-8 Linux オペレーティングシステムインストールガイド



Part No: E55389-01
2014 年 6 月

Copyright © 2014, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用了ことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはOracle Corporationおよびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

Intel, Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD, Opteron, AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

このドキュメントの使用方法	5
Linux OS のインストールについて	9
サポートされている OS のバージョンおよび最新情報	9
サポートされている Linux オペレーティングシステム	10
OS のインストールオプション	10
単一サーバーへのインストール方法	11
Oracle System Assistant	12
Oracle System Assistant の OS のインストールタスク	13
Oracle System Assistant の取得	13
OS のインストールの準備	15
インストールメディアキットのダウンロード	15
▼ Oracle Linux メディアキットのダウンロード	15
▼ SLES メディアキットのダウンロード	16
▼ RHEL メディアキットのダウンロード	16
インストールのセットアップ	16
▼ ローカルコンソールのセットアップ	16
▼ リモートコンソールのセットアップ	17
BIOS の設定	21
▼ BIOS の最適なデフォルト設定のロード	21
▼ BIOS ブートモードの設定	22
オペレーティングシステムのインストール	25
▼ Linux OS のインストール (Oracle System Assistant)	25
Linux OS の手動によるインストール	29
▼ Oracle Linux の手動によるインストール	29
▼ SLES の手動によるインストール	33
▼ RHEL の手動によるインストール	36
サーバーシステムツールのインストールおよびドライバの更新	40
▼ サーバーシステムツールのインストール	40
▼ システムドライバの更新またはインストール	41
Linux OS の新しいバージョンへの更新	42
▼ Oracle Linux オペレーティングシステムバージョンの更新	43

▼ SLES オペレーティングシステムバージョンの更新	43
▼ RHEL オペレーティングシステムバージョンの更新	44
索引	47

このドキュメントの使用方法

このセクションでは、Oracle の Sun Server X4-8 用の最新のファームウェア、ソフトウェア、およびドキュメントの入手方法を説明します。フィードバック用のリンクおよびドキュメントの変更履歴も記載されています。

- [5 ページの「Sun Server X4-8 モデル命名規則」](#)
- [5 ページの「最新のファームウェアとソフトウェアの入手」](#)
- [6 ページの「Oracle サポートへのアクセス」](#)
- [6 ページの「ドキュメントとフィードバック」](#)
- [6 ページの「このドキュメントについて」](#)
- [7 ページの「サポートとトレーニング」](#)
- [7 ページの「寄稿者」](#)
- [7 ページの「変更履歴」](#)

Sun Server X4-8 モデル命名規則

Sun Server X4-8 という名前の意味は次のとおりです。

- X は、x86 製品であることを意味します。
- 最初の数字 4 は、サーバーの世代を意味します。
- 2 番目の数字 8 は、プロセッサの数を意味します。

最新のファームウェアとソフトウェアの入手

Oracle x86 サーバー、サーバー (ブレード)、およびブレードシャーシのファームウェア、ドライバ、およびその他のハードウェア関連ソフトウェアは、定期的に更新されています。

最新バージョンは次の 3 つのうちいずれかの方法で入手できます。

- Oracle System Assistant – これは、工場出荷時にインストールされる Sun Oracle x86 サーバー向けの新しいオプションです。これには必要なすべてのツールとドライバ

が含まれており、ほとんどのサーバーに取り付けられている USB ドライブ上にあります。

- My Oracle Support – <https://support.oracle.com>
- 物理メディアのリクエスト – My Oracle Support から入手可能なダウンロード (パッチ) を含む DVD をリクエストできます。サポート Web サイト上の「問合せ」リンクを使用してください。

Oracle サポートへのアクセス

Oracle のお客様は、My Oracle Support を通して電子サポートにアクセスできます。詳細については、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> または聴覚に障害をお持ちの場合は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

ドキュメントとフィードバック

ドキュメント	リンク
すべての Oracle 製品	http://www.oracle.com/documentation
Sun Server X4-8	http://www.oracle.com/goto/X4-8/docs
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM)。『プロダクトノート』にリストされている、サポートされている Oracle ILOM のバージョンのドキュメントを参照してください。	http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs
Oracle Hardware Management Pack。『プロダクトノート』にリストされている、サポートされている Oracle HMP のバージョンのドキュメントを参照してください。	www.oracle.com/goto/ohmp/docs

このドキュメントについてのフィードバックは <http://www.oracle.com/goto/docfeedback> からお寄せください。

このドキュメントについて

このドキュメントセット内の情報はトピックに基づく形式 (オンラインヘルプと同様) で表示されるため、章、付録、およびセクション番号は含まれません。

サポートとトレーニング

次の Web サイトに追加のリソースがあります。

- サポート: <https://support.oracle.com>
- トレーニング: <http://education.oracle.com>

寄稿者

主な執筆者: Ray Angelo、Michael Bechler、Cynthia Chin-Lee、Lisa Kuder、Mark McGothigan、Ralph Woodley。

寄稿者: William Schweickert、Anthony Villamor、Mick Tabor、Richard Masoner、Tamra Smith-Wasel、Denise Silverman。

変更履歴

次の一覧はこのドキュメントセットのリリース履歴です。

- 2014 年 4 月。初版。
- 2014 年 6 月。製品リリースのための変更。

Linux OS のインストールについて

注記 - Oracle Linux がインストール済みの Sun Server X4-8 がある場合、オペレーティングシステムの構成方法については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』を参照してください。

次のタスクの表を使用して、Sun Server X4-8 に Linux のサポートされているバージョンをインストールします。

手 順	タスク	リンク
1	サーバーの最初の設置および設定の手順を実行します。	『Sun Server X4-8 設置ガイド』
2	サポートされているオペレーティングシステムの一覧を含め、最新のサーバーハードウェアおよびソフトウェア情報を確認します。	『Sun Server X4-8 プロダクトノート』
3	単一のサーバーまたは複数のサーバーでの OS のインストールのオプションを確認します。	10 ページの「OS のインストールオプション」
4	OS のインストールプロセスでの Oracle System Assistant の役割を確認します。	12 ページの「Oracle System Assistant」
5	必要な手順を実行して、OS のインストールの準備をします。	「OS のインストールの準備」

サポートされている OS のバージョンおよび最新情報

このセクションを使用して、Linux のサポートされているバージョンおよび最新のサーバー関連情報を取得する方法について学習します。

- [10 ページの「サポートされている Linux オペレーティングシステム」](#)

サポートされている Linux オペレーティングシステム

サーバーのリリースの時点では、次の Linux オペレーティングシステムがサポートされています。

Linux OS のバージョン	エディション
Oracle Linux	Oracle Linux 5.10 および 6.5 (x64 ビット)、UEK R3 {Unbreakable Enterprise Kernel Release 3} に基づく
SUSE Linux Enterprise Server (SLES)	SLES 11 SP3
Red Hat Enterprise Linux (RHEL)	RHEL (x64 ビット) 5.10 および 6.5

最新のサポートされているバージョンについては、次を参照してください。

<https://wikis.oracle.com/display/SystemsComm/Sun+Server+X4-8#tab:Operating-Systems>

注記 - サーバーに関する最新情報は、『*Sun Server X4-8 プロダクトノート*』で保持されています。プロダクトノートドキュメントには、サポートされているオペレーティングシステム、入手可能なファームウェア更新、およびサーバーのハードウェアまたはソフトウェアの問題についての詳しい情報が記載されています。詳細については、<http://www.oracle.com/goto/X4-8/docs> にある『*Sun Server X4-8 プロダクトノート*』を参照してください。

OS のインストールオプション

OS を単一のサーバーにインストールすることも、複数のサーバーにインストールすることもできます。このドキュメントの範囲は、単一サーバーへの OS のインストールです。次の表に、これら 2 つのインストールオプションに関する情報を示します。

オプション	説明
複数のサーバー	Oracle Enterprise Manager Ops Center を使用して複数のシステムにインストールする方法については、次を参照してください。 http://www.oracle.com/technetwork/oem/ops-center/index.html

オプション	説明
単一のサーバー	次のいずれかの方法を使用して、単一のサーバーに OS をインストールします。 ■ ローカル: OS のインストールは、サーバーでローカルに実行されます。シャーンにサーバーを物理的に設置し終えたばかりの場合は、このオプションを使用します。追加のハードウェアが必要です。 ■ リモート: OS のインストールはリモートの場所から実行されます。Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーションを使用して、Oracle System Assistant にアクセスするか、手動による OS のインストールを実行します。 注記 - Oracle System Assistant は、単一のサーバーでの OS のインストールのためのもっとも簡単な方法です。

関連情報

- [11 ページの「単一サーバーへのインストール方法」](#)
- [12 ページの「Oracle System Assistant」](#)

単一サーバーへのインストール方法

Linux インストールメディアの提供方法を選択します。次の情報を使用して、ローカルかリモートのどちらの OS のインストールがニーズにもっとも適しているかを判断します。

メディアの配布方法	その他の要件	詳細情報
Oracle System Assistant を使用したローカルでの OS インストール	モニター、USB キーボードとマウス、USB OSA デバイス、Linux 配布メディア。	12 ページの「補助付き OS インストール」
Oracle System Assistant を使用したりリモートでの OS インストール	Oracle ILOM リモートコンソールアプリケーション、リダイレクトされた CD/DVD ドライブまたは ISO イメージファイル、Linux 配布メディア。	12 ページの「補助付き OS インストール」
サーバーに接続された物理的な CD/DVD ドライブを使用したローカルでの OS インストール。	モニター、USB キーボードとマウス、USB CD/DVD ドライブ、Linux 配布メディア。	12 ページの「手動による OS インストール」
CD/DVD ドライブまたは CD/DVD ISO イメージを使用したリモートでの OS インストール	ブラウザを備えたりリモートシステムを使用する Oracle ILOM リモートコンソール、物理 CD/DVD ドライブが接続されていること、Linux 配布メディア、サーバーの管理ポートに対するネットワークアクセス。	12 ページの「手動による OS インストール」

補助付き OS インストール

これは、サポートされている OS をサーバーにインストールするためのもっとも簡単な方法です。この方法では、Oracle System Assistant アプリケーションを使用します。ローカルまたはリモートの CD/DVD ドライブ、USB デバイス、CD/DVD イメージのいずれかで Linux OS インストールメディアを提供すると、Oracle System Assistant がインストールプロセスを進め、必要に応じてドライバをインストールします。Oracle System Assistant がサーバーにインストールされている必要があります。

関連情報

- [12 ページの「手動による OS インストール」](#)
- [12 ページの「Oracle System Assistant」](#)

手動による OS インストール

この方法では、ローカルまたはリモートの CD/DVD ドライブ、USB デバイス、CD/DVD イメージのいずれかで Linux 配布メディアを提供します。必要なドライバを提供する必要もあります。サーバー用のドライバは、My Oracle Support から OS 固有およびサーバー固有のパッケージとして入手できます。OS をインストールするには、配布メディアのインストールウィザードを使用します。

関連情報

- [12 ページの「補助付き OS インストール」](#)

Oracle System Assistant

Oracle System Assistant は、x86 Sun サーバーおよび Sun Blade 用の単一サーバーシステム起動/保守ツールです。単一サーバーをすばやく簡単に起動および保守するには、Oracle System Assistant ツールを使用します。

Oracle System Assistant のコンポーネントは次のとおりです。

- Oracle Hardware Management Pack
- 起動と保守のプロビジョニングタスク (OS のインストールタスクを含む) へのユーザーインタフェースアクセス
- Oracle Linux コマンド行環境

- オペレーティングシステム用のドライバとツール
- サーバー固有のファームウェア
- サーバーのドキュメント

Oracle System Assistant はサーバーに常駐し、保守はオンライン更新によって行われます。

関連情報

- [13 ページの「Oracle System Assistant の OS のインストールタスク」](#)
- [13 ページの「Oracle System Assistant の取得」](#)

Oracle System Assistant の OS のインストールタスク

Oracle System Assistant の OS のインストールタスクは、サポートされている Linux OS のインストールに役立ちます。OS インストールメディアを提供すると、Oracle System Assistant の手順に従ってインストールプロセスを実行できます。続いて、サーバーハードウェア構成に基づいて、適切なドライバをインストールします。

Oracle System Assistant にはローカルでもリモートでもアクセスできます。サーバーのインストールが終了した直後の場合、Oracle System Assistant を物理的にサーバーに間にローカルで使用することで、サーバーを迅速かつ効率的に起動できます。サーバーの稼働後は、すべての機能を維持しながら、Oracle System Assistant にリモートで便利にアクセスできます。

関連情報

- [13 ページの「Oracle System Assistant の取得」](#)

Oracle System Assistant の取得

Oracle System Assistant は、サーバーにすでにインストールされていることもあります。サーバーに Oracle System Assistant が存在するかどうかの確認方法、および更新や復旧手順の実行方法については、『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

関連情報

- [13 ページの「Oracle System Assistant の OS のインストールタスク」](#)

OS のインストールの準備

このセクションの手順を使用して、OS のインストールの準備をします。次の表に、タスクの一覧を示します。

手順	タスク	リンク
1	OS インストールタスク表を確認します。	「Linux OS のインストールについて」
2	OS のインストールメディアキットをダウンロードします。	15 ページの「インストールメディアキットのダウンロード」
3	ローカルまたはリモートでのインストールを決定し、インストールをセットアップします。	■ ローカルインストール: 16 ページの「ローカルコンソールのセットアップ」 ■ リモートインストール: 17 ページの「リモートコンソールのセットアップ」
4	BIOS を設定します。	21 ページの「BIOS の設定」
5	OS をインストールします。	「オペレーティングシステムのインストール」

インストールメディアキットのダウンロード

このセクションでは、Linux インストールメディアの次のダウンロード手順について説明します。

- [15 ページの「Oracle Linux メディアキットのダウンロード」](#)
- [16 ページの「SLES メディアキットのダウンロード」](#)
- [16 ページの「RHEL メディアキットのダウンロード」](#)

▼ Oracle Linux メディアキットのダウンロード

1. Oracle Linux の場合は、Oracle e-delivery サイト <http://edelivery.oracle.com/linux> にアクセスします。
2. アカウントを持っていない場合は、アカウントを作成します。

更新された ISO イメージをダウンロードするにはアカウントが必要です。

3. Oracle Linux を検索してダウンロードします。

次の手順 [21 ページの「BIOS の設定」](#)

▼ SLES メディアキットのダウンロード

1. Novell アカウント情報を取得します。

ISO イメージをダウンロードするには Novell アカウントが必要です。

2. SUSE Linux Enterprise Server メディアキットを <http://download.novell.com> からダウンロードします。

次の手順 [21 ページの「BIOS の設定」](#)

▼ RHEL メディアキットのダウンロード

1. 企業アカウント情報を入手します。

更新された ISO イメージをダウンロードするには、企業アカウントが必要です。

2. Red Hat Enterprise Linux Update メディアキットを <http://rhn.redhat.com> からダウンロードします。

次の手順 [21 ページの「BIOS の設定」](#)

インストールのセットアップ

- [16 ページの「ローカルコンソールのセットアップ」](#)
- [17 ページの「リモートコンソールのセットアップ」](#)

▼ ローカルコンソールのセットアップ

この手順を使用して、ローカルインストールをセットアップします。ローカル OS インストールはサーバーで実行されます。

推奨されるローカルインストール方法は、Oracle System Assistant の OS のインストールタスクです。

- 始める前に
- サーバーを設置します。『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』を参照してください。
 - 次の項目を入手します。
 - 15 ピン (DB-15) コネクタ機能を備えたビデオモニター
 - USB キーボードとマウス
 - USB デバイス (CD/DVD ドライブまたはサムドライブ)
 - サーバーに含まれる更新が確実に最新のものになるようにするために、サーバーの Web アクセスが推奨されます。
1. サーバーがスタンバイ電源になっていることを確認します。
 2. ビデオモニターをサーバー前面のビデオコネクタに接続します。
 3. キーボードとマウスを、サーバー前面のいずれかの USB コネクタに接続します。
 4. CD/DVD ドライブをサーバーの前面にあるほかの USB コネクタに接続します (サーバーに DVD ドライブが組み込まれていない場合)。

次の手順 [15 ページの「インストールメディアキットのダウンロード」](#)

▼ リモートコンソールのセットアップ

この手順を使用して、リモートの Oracle System Assistant の補助付きインストールまたはリモートの手動 (補助なし) インストールをセットアップします。リモート OS インストールは、Oracle ILOM リモートコンソールプラスアプリケーションおよびリダイレクトされた CD/DVD ドライブまたは CD ISO イメージを使用して実行されます。リモートインストールとして推奨される手順は、Oracle System Assistant の補助付き OS インストールタスクです。

注記 - CD/DVD-ROM または CD/DVD-ROM イメージのオプションを使用して OS をインストールすると、CD/DVD-ROM のコンテンツにネットワーク経由でアクセスするため、インストールにかかる時間が大幅に長くなります。インストールの所要時間は、ネットワークの接続状態とトラフィックによって異なります。また、このインストール方法では、一時的なネットワークエラーにより問題が生じるリスクが高くなります。

始める前に 次の要件を満たしている必要があります。

- サーバーを設置します。『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』を参照してください。

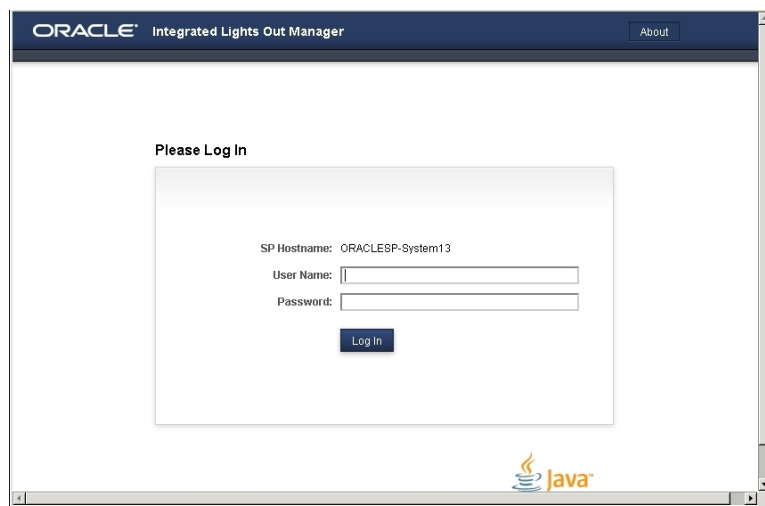
- サーバサービスプロセッサ (SP) が、使用しているサーバの Oracle ILOM ドキュメントの手順に従ってセットアップ済みです。
- サーバの Ethernet 管理ポートにアクセスできるネットワークに Oracle ILOM リモートコンソールプラスシステムが接続されています。
- 使用しているサーバでの Oracle ILOM のバージョンの『Oracle ILOM 構成および保守用管理者ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/ILOM/docs>) での説明に従って、リモートクライアントで Oracle ILOM リモートコンソールプラスを実行するための Java、ブラウザ、および構成の要件を満たしていることを確認します。

注記 - この手順に示されている画面イメージの一部は、表示される画面とは異なる場合があります。

1. Oracle ILOM にアクセスするには、サービスプロセッサの IP アドレスを Oracle ILOM リモートコンソールプラスシステム上のブラウザに入力します。

必要に応じて、セキュリティのプロンプトに答えます。

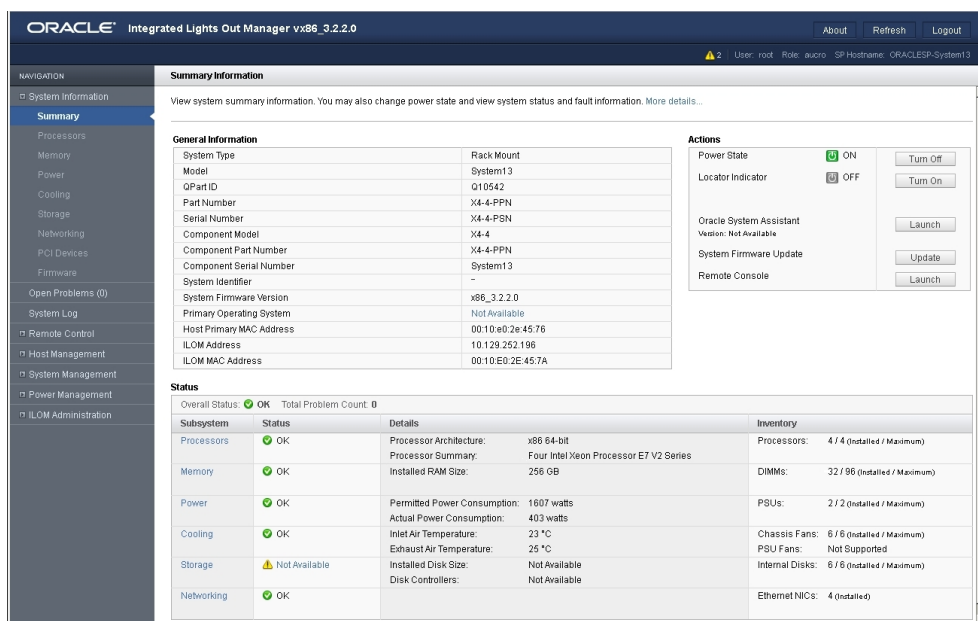
Oracle ILOM のログイン画面が表示されます。



2. ユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。

Oracle ILOM リモートコンソールプラス機能を使用するには、Console 役割の権限を持つアカウントを使用してログインする必要があります。

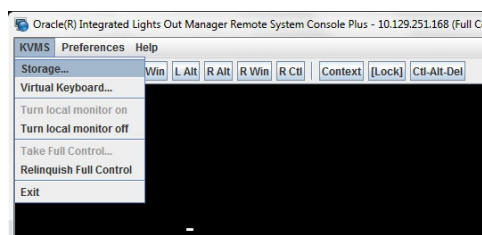
Oracle ILOM の「System Summary」画面が表示されます。



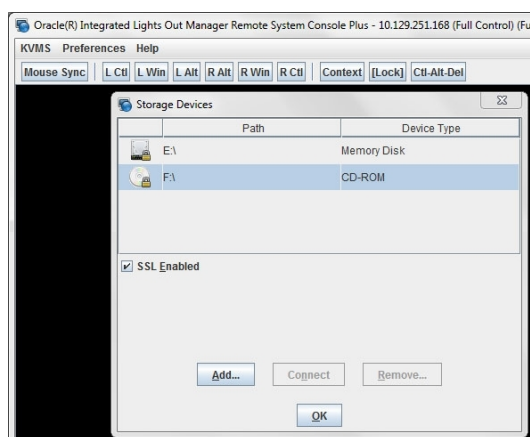
3. 「Remote Console Launch」ボタンをクリックします。
表示されるプロンプトがある場合は、それに答えます。
「Oracle ILOM Remote Console Plus」画面が表示されます。
4. ストレージメディアをリダイレクトするには、次のアクションを実行します。
 - a. リダイレクションセッションのフルコントロール権限があることを確認します。フルコントロール権限がない場合は、「KVMS」メニューの「Take Full-Control」をクリックします。

注記 - フルコントロール権限を持つプライマリユーザーの場合、「KVMS」メニューの「Take Full-Control」オプションは無効になっています。

- b. 「KVMS」メニューの「Storage」をクリックします。



「Storage Device」ダイアログボックスが表示されます。



注記 - 「Storage Device」ダイアログボックスには、Oracle ILOM リモートコンソールプラスクライアントで検出されたストレージドライブデバイス (CD、DVD、フロッピー、USB デバイスなど) が自動的に表示されます。ブート可能メディアがドライブ内に検出されない場合、ドライブ上にロックアイコンが表示されて、1) ドライブが存在すること、および 2) ドライブ内にブート可能メディアが見つからなかったことを示します。

- c. ストレージイメージ (CD/DVD イメージなど) を「Storage Device」ダイアログボックスに追加するには、「Add」をクリックします。
- d. 「Storage Device」ダイアログボックスからストレージメディアをリダイレクトするには、ストレージメディアを選択して「Connect」をクリックします。

注記 - 「Storage Device」ダイアログで「Connect」をクリックすると、「Connect」ボタンのラベルが「Disconnect」に変化します。

次の手順 ■ [21 ページの「BIOS の設定」](#)

BIOS の設定

オペレーティングシステムをインストールする前に、実行する予定のインストールの種類をサポートするように、BIOS 設定が構成されていることを確認してください。次のトピックでは、インストールをサポートするように BIOS を構成する方法について具体的に説明しています。

- [21 ページの「BIOS の最適なデフォルト設定のロード」](#)
- [22 ページの「BIOS ブートモードの設定」](#)

▼ BIOS の最適なデフォルト設定のロード



注意 - この手順では、BIOS の設定をデフォルト値にリセットし、以前にカスタマイズした設定をすべて上書きします。カスタマイズされた設定を維持するには、デフォルト値をロードする前に、各メニューを確認し、カスタマイズされた値を書きとめます。

BIOS 設定ユーティリティーには、サーバーにとって最適な BIOS 設定をロードするためのオプションが含まれています。この手順を新しく設置されたサーバーで実行して、BIOS が最適なデフォルト値に設定されるようにします。

- 始める前に
- サーバーにはストレージドライブが適切に取り付けられています。
 - サーバーへのコンソール接続が確立されています。詳細については、[16 ページの「インストールのセットアップ」](#)を参照してください。

1. **サーバーの電源を入れます。**
コンソールに POST メッセージが表示されます。
2. **メッセージに注目し、プロンプトが表示されたら、F2 を押して BIOS 設定ユーティリティーにアクセスします。**
BIOS 設定ユーティリティーのメイン画面が表示されます。
3. **出荷時のデフォルト値が設定されるようにするには、F9 を押します。**
4. **変更を保存して BIOS 設定ユーティリティーを終了するには、F10 を押します。**

次の手順 [22 ページの「BIOS ブートモードの設定」](#)

▼ BIOS ブートモードの設定

BIOS ファームウェアは、レガシーブートモードと UEFI (Unified Extensible Firmware Interface) ブートモードの両方をサポートしていますが、デフォルト設定はレガシーブートモードです。オペレーティングシステムによっては、レガシー BIOS と UEFI BIOS の両方のブートモードをサポートしているものもあれば、レガシーブートモードのみをサポートしているものもあります。

次の Linux OS バージョンでは UEFI ブートモードがサポートされています。

- Oracle Linux 6.x
- RHEL 6.x
- SLES 11.x

次の Linux OS バージョンでは、UEFI ブートモードはサポートされていません。

- Oracle Linux 5.x
- RHEL 5.x
- SLES 10.x

次は、OS をインストールする前に BIOS ブートモードを設定するためのオプションです。

- OS が Legacy BIOS ブートモードのみをサポートしている場合は、OS のインストールを行う前に、BIOS がレガシーモードに設定されていることを確認します。
- OS がレガシー BIOS と UEFI BIOS の両方のブートモードをサポートしている場合は、OS のインストールを実行する前に、レガシー BIOS ブートモードと UEFI BIOS ブートモードのどちらかに BIOS を設定できます。

1. サーバーの電源を入れます。

コンソールに POST メッセージが表示されます。

2. メッセージに注目し、プロンプトが表示されたら、F2 を押して BIOS 設定ユーティリティにアクセスします。

BIOS 設定ユーティリティのメイン画面が表示されます。

3. BIOS 設定ユーティリティで、左右の矢印キーを使用して「Boot」メニューに移動します。

「Boot」メニュー画面が表示されます。

4. 下矢印キーを使用して、「UEFI/BIOS Boot Mode」フィールドを選択します。

5. Enter キーを押し、上下の矢印キーを使用して BIOS ブートモードオプションを選択します。
6. 変更を保存して BIOS 設定ユーティリティを終了するには、F10 を押します。

次の手順 [「オペレーティングシステムのインストール」](#)

オペレーティングシステムのインストール

このセクションでは、OS をインストールするためのタスクについて説明します。次の表に、タスクの一覧を示します。

手 順	タスク	リンク
1	OS インストールに向けてサーバーを準備します。	「OS のインストールの準備」
2	選択した方法を使用して OS をインストールします。	■ 25 ページの「Linux OS のインストール (Oracle System Assistant)」 ■ 29 ページの「Linux OS の手動によるインストール」
3	サーバーツールおよびドライバを更新します。	40 ページの「サーバーシステムツールのインストールおよびドライバの更新」
4	OS を新しいバージョンに更新します。	42 ページの「Linux OS の新しいバージョンへの更新」

▼ Linux OS のインストール (Oracle System Assistant)

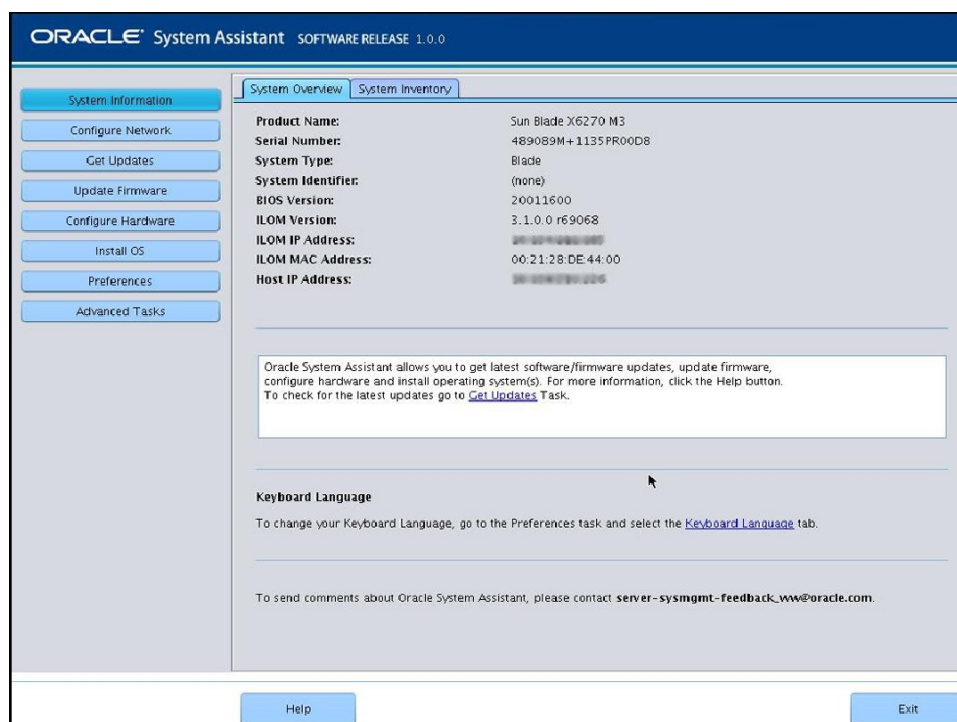
Oracle System Assistant による OS のインストールタスクでは、Linux オペレーティングシステムの補助付きインストールを提供します。

- 始める前に
- サーバーストレージドライブを準備します。詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』を参照してください。
 - 「[OS のインストールの準備](#)」の手順を実行します。
 - OS のインストールおよび構成プロセス中、論理および物理ネットワーク名を指定しなければならない場合があります。詳細については、[29 ページの「Linux OS の手動によるインストール」](#)を参照してください。
 - ローカルインストール: プロンプトが表示されたら、接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブにインストールメディアを挿入します。

- リモートインストール: リモートコンソールシステムの CD/DVD-ROM ドライブにインストールメディアを挿入します。リモートコンソールの「Devices」メニューから、CD-ROM を選択していることを確認してください。
- ISO イメージを使用したインストール: リモートコンソールシステムからそのイメージにアクセスできることを確認します。リモートコンソールの「Devices」メニューから、「CD-ROM Image」を選択していることを確認してください。

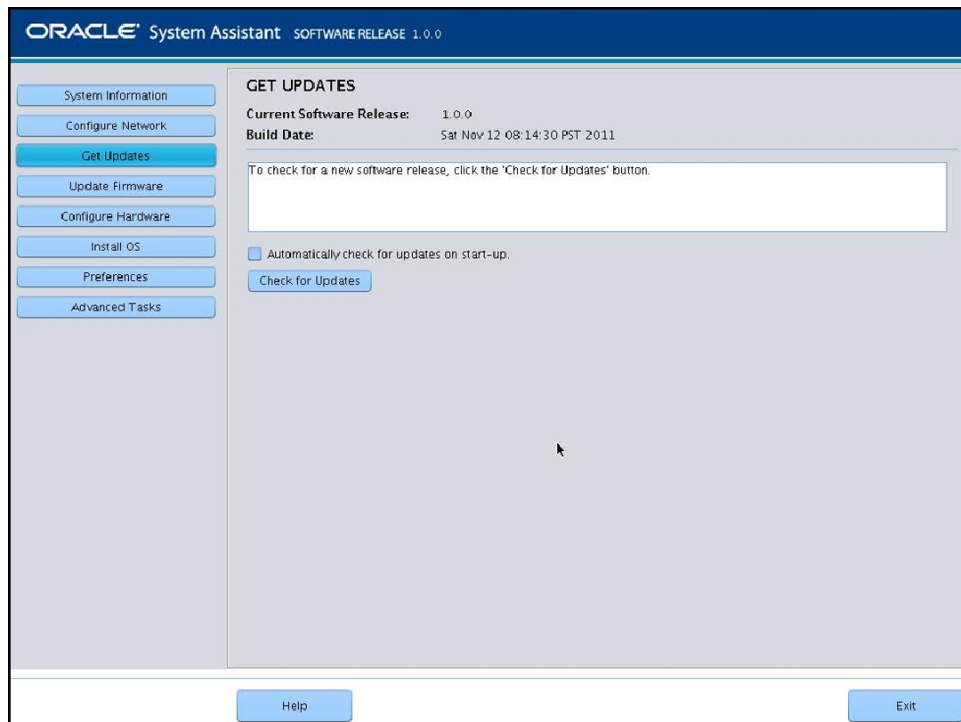
1. サーバーがスタンバイ電源になっていることを確認します。
2. サーバーをブートし、ビデオモニターまたはリモートコンソール画面を注視して、F9 キーを押して Oracle System Assistant を起動するように求めるプロンプトが表示されるのを待ちます。
3. プロンプトが表示されたら F9 キーを押します。

Oracle System Assistant のメイン画面が表示されます。

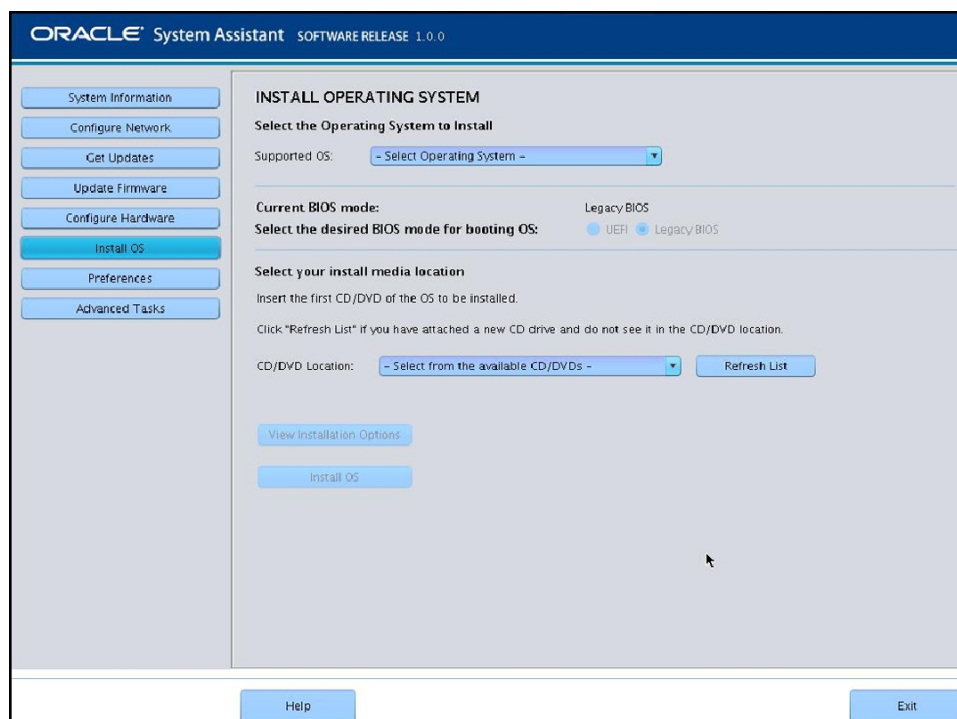


4. Oracle System Assistant アプリケーションを更新するには、「Get Updates」ボタンをクリックします。

注記 - Oracle System Assistant を更新するには、サーバーの Web アクセスが必要です。



5. **サーバーのファームウェアを更新するには、「Update Firmware」ボタンをクリックします。**
このアクションにより、OS のインストール開始前に、サーバーのファームウェアおよびドライバが確実に最新のものになります。
6. **OS をインストールするには、「Install OS」ボタンをクリックします。**
「Install Operating System」画面が表示されます。



7. 「Select Operating System」ドロップダウンリストから、OS を選択します。
8. 必要に応じて、BIOS ブートモードを選択します。21 ページの「BIOS の設定」を参照してください。

詳細については、『Oracle X4 シリーズサーバー管理ガイド』(<http://www.oracle.com/goto/x86AdminDiag/docs>) を参照してください。

9. 「Select your install media location」セクションで、インストールメディアの場所を指定します。

これは OS 配布メディアの場所です。CD/DVD ドライブを接続した場合は、ドロップダウンリストに表示するために「Refresh」ボタンのクリックが必要になることがあります。

10. デバイスを選択するには、「View Installation Options」をクリックします。

これは、OS をインストールするデバイスです。



注意 - データの損失。OS のインストールによって、ディスクの内容が消去されます。選択したディスク上のデータはすべて消去されます。

11. OS のインストールを開始するには、「Install OS」をクリックします。
12. プロンプトに従ってインストールを完了します。
サーバーがブートします。

次の手順 [40 ページの「サーバーシステムツールのインストールおよびドライバの更新」](#)

Linux OS の手動によるインストール

Linux OS をインストールするためのもっとも簡単な方法は、Oracle System Assistant を使用することです。詳細については、[25 ページの「Linux OS のインストール \(Oracle System Assistant\)」](#)を参照してください。

次のセクションの手順を使用して、Oracle System Assistant の補助なしで、Linux OS を手動でインストールします。

- [29 ページの「Oracle Linux の手動によるインストール」](#)
- [33 ページの「SLES の手動によるインストール」](#)
- [36 ページの「RHEL の手動によるインストール」](#)

▼ Oracle Linux の手動によるインストール

Oracle System Assistant を使わずに Oracle Linux OS をインストールするには、この手順を使用します。

- 始める前に
- サーバーストレージドライブを準備します。詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』を参照してください。
 - サーバー BIOS ブートモード (UEFI またはレガシー) を選択してください ([「OS のインストールの準備」](#)を参照)。
 - ローカルまたはリモートインストール用に準備を整えてください ([「OS のインストールの準備」](#)を参照)。その後、次のいずれかのインストール方法を実行します。
 - ローカルインストール: 接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブまたは USB ポートに OS 配布メディアを挿入します。
 - リモートインストール: 次のいずれかの OS 配布メディアタイプを選択します。
 - OS 配布メディアが DVD-ROM または USB イメージの場合は、メディアをリモートクライアントの DVD-ROM ドライブまたは USB ポートに挿入

し、Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」 > 「Storage」メニューからメディアをマウントします。

- OS 配布メディアの ISO イメージを使用する場合は、イメージが Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」 > 「Storage」メニューからマウントされていることを確認します。
- インストールを完了するには、次の Oracle Linux インストールに関する記事をダウンロードします。
 - Oracle Linux 5 の場合は、<http://www.oracle-base.com/articles/linux/OracleEnterpriseLinux5Installation.php> にアクセスします
 - Oracle Linux 6 の場合は、<http://www.oracle-base.com/articles/linux/OracleLinux6Installation.php> にアクセスします

1. サーバーの電源を入れるか、またはリブートします。

リモートインストール方法を使用している場合は、Oracle ILOM を使用してサーバーの電源を入れたりリブートしたりすることができます。

BIOS メッセージが表示されます。

注記 - BIOS メッセージ (BIOS メニュー選択リストも含む) はすぐに消えてしまいます。メッセージを見逃してしまった場合は、サーバーの電源を入れ直し、ブート中に F8 キーを押したままにして、BBS ポップアップメニューが表示されるのを待ちます。

```
Version 2.14.1219. Copyright (C) 2011 American Megatrends, Inc.  
BIOS Date: 09/06/2011 12:12:06 Ver: 20011300  
Press F2 to run Setup (CTRL+E on serial keyboard)  
Press F8 for BBS Popup (CTRL+P on serial keyboard)  
Press F12 for network boot (CTRL+N on serial keyboard)  
Press F9 to start Oracle System Assistant
```

2. 選択リストが表示されるまで画面を注視し、F8 を押して「BBS Popup」を選択します。

しばらくして、「select boot device」メニューと、使用可能なブートデバイスのリストが表示されます。

3. 次のようにリストからブートデバイスを選択します。

- ローカルインストール: Linux 配布メディアをサーバーの CD/DVD ドライブに挿入し、デバイスのリストから選択し、Enter を押します。
- リモートインストール: クライアントのリモートでマウントされた仮想 CD/DVD ドライブを選択し、Enter を押します。

制御がメディア上の OS インストールプログラムに移ります。

4. 論理および物理ネットワークインタフェース名を特定します。次の手順を実行します。

- a. ブートプロンプトで、**linux rescue** と入力し、Enter を押します。

「Choose a Language」画面が表示されます。

- b. 「Choose a Language」画面で、適切な言語を選択して、「OK」をクリックします。

「Keyboard Type」画面が表示されます。

- c. 「Keyboard Type」画面で、適切な構成を選択してから「OK」をクリックします。

「Setup Network」画面が表示されます。

- d. 「Setup Network」画面で、「No」をクリックします。

「Rescue」画面が表示されます。

- e. 「Rescue」画面で、「Skip」をクリックします。

ユーザーシェルが表示されます。

- f. コマンドプロンプト (#) で、すべてのネットワークインタフェースを表示するために、次のコマンドを入力して Enter を押します。

```
# ifconfig -a
```

Linux 名前付きネットワークインタフェースの出力が表示されます。

複数のネットワークインタフェースが存在して、インタフェースの出力が画面に入りきらない場合には、インタフェースごとに出力を表示できます。

- g. 各ネットワークインタフェースの出力を表示するには、コマンドプロンプトで次を入力してから Enter キーを押します。

```
# ifconfig eth#
```

ここで、*eth#* はインタフェース番号です。

たとえば、次のように入力した場合:

```
# ifconfig eth0
```

eth0 の出力が表示されます。

```
eth0  Link encap:Ethernet  HWaddr 00:14:4F:8D:52:BE
```

```
inet addr:10.192.92.192 Bcast:10.192.92.255 Mask:255.255.254.0
inet6 addr: fe80::214:4fff:fe8d:52be/64 Scope:Link
UP BROADCAST RUNNING MULTICAST MTU:1500 Metric:1
RX packets:14461296 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
TX packets:1061312 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
collisions:0 txqueuelen:1000
RX bytes:1282625453 (1.1 GiB) TX bytes:118834056 (113.3 MiB)
Interrupt:54 Base address:0xc000
```

- 最初の列の **eth0** エントリは、Oracle Linux 論理名付きインタフェースです。出力の最初の列は、Oracle Linux または RHEL がネットワークインタフェースに割り当てた論理名を表します。

- 第 2 列 (1 行目) の **00:14:4F:8D:52:BE** エントリは、ネットワークポートの物理 MAC アドレスを指します。

- h. あとから参照できるように、論理ネットワークインタフェース名と物理ポートの MAC アドレスを記録します。Oracle Linux または RHEL OS のインストール時にネットワークインタフェースを構成する際に、この記録を参照する必要があります。
5. 終了したら、次のコマンドを使用して、サーバーをリブートして OS インストールプログラムを再起動します。

reboot

6. 手順 2 および 3 を繰り返して、OS メディアが含まれているブートデバイスを選択します。手順 5 に進みます。
7. 使用するインタフェースのタイプによって、ブートプロンプトで次のいずれかを実行します。

- テキストモードの場合、ブートプロンプトに次のコマンドを入力します。

```
boot: linux text
```

- グラフィカルモードの場合、ブートプロンプトで Enter を押します。

8. インストールを完了するには、この手順の最初に記載されているバージョン固有のインストールに関する記事を参照してください。

注記 - Linux 以外にインストールされているオペレーティングシステム (たとえば Oracle Solaris OS) があれば、インストールプロセスでパーティションとして表示されます。そのパーティションに Oracle Linux をインストールすると、以前の OS が上書きされます。そのパーティションを保持する場合は、Oracle Linux を別のパーティションにインストールする必要があります。

次の手順 [40 ページの「サーバーシステムツールのインストールおよびドライバの更新」](#)

▼ SLES の手動によるインストール

- 始める前に
- サーバーストレージドライブを準備します。詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』を参照してください。
 - あらかじめ BIOS ブートモード (UEFI またはレガシー) を選択してください ([「OS のインストールの準備」](#)を参照)。
 - あらかじめローカルまたはリモートインストール用に準備を整えてください ([「OS のインストールの準備」](#)を参照)。その後、次のいずれかを実行します。
 - ローカルインストール: 接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブまたは USB ポートに OS 配布メディアを挿入します。
 - リモートインストール: OS 配布メディアが DVD-ROM または USB イメージの場合は、リモートクライアントの DVD-ROM ドライブまたは USB ポートに挿入し、Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」>「Storage」メニューからマウントします。

OS 配布メディアの ISO イメージを使用する場合は、イメージが Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」>「Storage」メニューからマウントされていることを確認します。
 - メディアキットに含まれている SLES OS インストールガイドを入手します。

注記 - Linux 以外にインストールされているオペレーティングシステム (たとえば Solaris OS) があれば、インストールプロセスでパーティションとして表示されます。そのパーティションに SLES をインストールすると、OS が上書きされます。パーティションを保持する場合は、SLES を別のパーティションにインストールする必要があります。

1. サーバーの電源を入れるか、またはリブートします。

リモートインストール方法を使用している場合は、Oracle ILOM を使用してサーバーの電源を入れたりリブートしたりすることができます。

BIOS メッセージが表示されます。

注記 - BIOS メッセージ (BIOS メニュー選択リストも含む) はすぐに消えてしまいます。メッセージを見逃してしまった場合は、サーバーの電源を入れ直し、ブート中に F8 キーを押したままにして、BBS ポップアップメニューが表示されるのを待ちます。

```
Version 2.14.1219. Copyright (C) 2011 American Megatrends, Inc.  
BIOS Date: 09/06/2011 12:12:06 Ver: 20011300  
Press F2 to run Setup (CTRL+E on serial keyboard)  
Press F8 for BBS Popup (CTRL+P on serial keyboard)  
Press F12 for network boot (CTRL+N on serial keyboard)  
Press F9 to start Oracle System Assistant
```

2. 選択リストが表示されるまで画面を注視し、F8 を押して「BBS Popup」を選択します。

しばらくして、「Select boot device」メニューと、使用可能なブートデバイスのリストが表示されます。

3. 次のようにリストからブートデバイスを選択します。

- ローカルインストール: Solaris 配布メディアをサーバーの CD/DVD ドライブまたは USB ポートに挿入し、デバイスのリストから選択し、Enter を押します。
- リモートインストール: クライアントのリモートでマウントされた仮想 CD/DVD ドライブまたは USB イメージを選択し、Enter を押します。

制御がメディア上の OS インストールプログラムに移ります。

4. 論理および物理ネットワークインタフェース名を特定します。次の手順を実行します。

- a. 「Rescue System」を選択し、Enter を押します。

メッセージ Loading Linux Kernel が表示され、それに続いて SUSE スプラッシュ画面、「Choose a Keyboard Map」画面が表示されます。

- b. 「Choose a Keyboard Map」画面で、適切なキーボード構成を選択して、「OK」をクリックします。

ユーザーシェルが起動して、「Rescue Login」プロンプトが表示されます。

- c. 「Rescue Login」プロンプトで、root と入力してログインし、Enter を押します。

レスキュープロンプトが表示されます。

- d. レスキュープロンプト (#) で、次のコマンドを入力してから Enter を押して、すべてのネットワークインタフェース (アクティブおよび非アクティブ) を表示します。

```
# ifconfig -a
```

Linux SUSE の名前付きおよび物理名付きネットワークインタフェースの出力が表示されます。見つかった各ネットワークインタフェースについて、次の例のような出力が一覧表示されます。

```
eth0  Link encap:Ethernet  HWaddr 00:14:4F:8D:52:BE
      inet addr:10.182.92.196  Bcast:10.182.93.255  Mask:255.255.254.0
      inet6 addr: fe80::214:4fff:fe8d:52be/64 Scope:Link
      UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
      RX packets:14463420 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
      TX packets:1061441 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
      collisions:0 txqueuelen:1000
      RX bytes:1282809896 (1.1 GiB)  TX bytes:118848836 (113.3 MiB)
      Interrupt:54 Base address:0xc000

eth1  Link encap:Ethernet  HWaddr 00:14:4F:8D:52:BF
      BROADCAST MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
      RX packets:0 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
      TX packets:0 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
      collisions:0 txqueuelen:1000
      RX bytes:0 (0.0 b)  TX bytes:0 (0.0 b)
      Interrupt:21 Base address:0x2000

eth2  Link encap:Ethernet  HWaddr 00:14:4F:8D:52:C0
      BROADCAST MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
      RX packets:0 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
      TX packets:0 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
      collisions:0 txqueuelen:1000
      RX bytes:0 (0.0 b)  TX bytes:0 (0.0 b)
      Interrupt:44 Base address:0x6000

eth3  Link encap:Ethernet  HWaddr 00:14:4F:8D:52:C1
      BROADCAST MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
      RX packets:0 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
      TX packets:0 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
      collisions:0 txqueuelen:1000
      RX bytes:0 (0.0 b)  TX bytes:0 (0.0 b)
      Interrupt:47 Base address:0xa000

lo    Link encap:Local Loopback
      inet addr:127.0.0.1  Mask:255.0.0.0
      inet6 addr: ::1/128 Scope:Host
      UP LOOPBACK RUNNING  MTU:16436  Metric:1
      RX packets:44421 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
      TX packets:44421 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
      collisions:0 txqueuelen:0
      RX bytes:4976408 (4.7 MiB)  TX bytes:4976408 (4.7 MiB)
```

- 最初の列の `eth0` エントリは、オペレーティングシステムによって割り当てられた Ethernet インタフェースの論理名です。
- 最初の列の `lo` エントリは、ループバックインタフェースです。
- 第 2 列 (1 行目) の `HWaddr 00:14:4F:8D:52:BE` エントリは、ネットワークポートの物理 MAC アドレスを指します。

複数のネットワークインタフェースが存在して、インタフェースの出力が画面に入りきらない場合には、インタフェースごとに出力を表示できます。

```
# ifconfig eth#
```

ここで、*eth#* はインタフェース番号です。

- e. あとから参照できるように、SUSE 論理ネットワークインタフェース名と物理ポートの MAC アドレスを記録します。

Linux SUSE OS インストール時にネットワークインタフェースを構成する際に、この記録を参照する必要があります。

- f. 終了したら、次のコマンドを使用して、サーバーをリブートして OS インストールプログラムを再起動します。
 - g. 手順 2 および 3 を繰り返して、OS メディアが含まれているブートデバイスを選択します。手順 5 に進みます。
5. 終了したら、次のコマンドを使用して、サーバーをリブートして OS インストールプログラムを再起動します。

```
# reboot
```

6. 手順 2 および 3 を繰り返して、OS メディアが含まれているブートデバイスを選択します。手順 7 に進みます。
7. OS インストールガイドの手順に従って、システムソフトウェアのインストールを完了します。

次の手順 [40 ページの「サーバーシステムツールのインストールおよびドライバの更新」](#)

▼ RHEL の手動によるインストール

- 始める前に
- サーバーストレージドライブを準備します。詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』を参照してください。
 - あらかじめ BIOS ブートモード (UEFI またはレガシー) を選択してください (『[OS のインストールの準備](#)』を参照)。
 - あらかじめローカルまたはリモートインストール用に準備を整えてください (『[OS のインストールの準備](#)』を参照)。その後、次のいずれかを実行します。
 - ローカルインストール: 接続された物理 CD/DVD-ROM ドライブまたは USB ポートに OS 配布メディアを挿入します。
 - リモートインストール: 次のいずれかを実行します。

- OS 配布メディアが DVD-ROM または USB イメージの場合は、リモートクライアントの DVD-ROM ドライブまたは USB ポートに挿入し、Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」>「Storage」メニューからマウントします。
- OS 配布メディアの ISO イメージを使用する場合は、イメージが Oracle ILOM リモートコンソールの「KVMS」>「Storage」メニューからマウントされていることを確認します。
- メディアキットに含まれている OEM OS インストールガイドを確認します。

注記 - Linux 以外にインストールされているオペレーティングシステム (たとえば Solaris OS) があれば、インストールプロセスでパーティションとして表示されます。そのパーティションに RHEL をインストールすると、OS が上書きされます。パーティションを保持する場合は、RHEL を別のパーティションにインストールする必要があります。

1. サーバーの電源を入れるか、またはリブートします。

リモートインストール方法を使用している場合は、Oracle ILOM を使用してサーバーの電源を入れたりリブートしたりすることができます。

BIOS メッセージが表示されます。

注記 - BIOS メッセージ (BIOS メニュー選択リストも含む) はすぐに消えてしまいます。メッセージを見逃してしまった場合は、サーバーの電源を入れ直し、ブート中に F8 キーを押したままにして、BBS ポップアップメニューが表示されるのを待ちます。

```
Version 2.14.1219. Copyright (C) 2011 American Megatrends, Inc.  
BIOS Date: 09/06/2011 12:12:06 Ver: 20011300  
Press F2 to run Setup (CTRL+E on serial keyboard)  
Press F8 for BBS Popup (CTRL+P on serial keyboard)  
Press F12 for network boot (CTRL+N on serial keyboard)  
Press F9 to start Oracle System Assistant
```

2. 選択リストが表示されるまで画面を注視し、F8 を押して「BBS Popup」を選択します。

しばらくして、「Select boot device」メニューと、使用可能なブートデバイスのリストが表示されます。

3. 次のようにリストからブートデバイスを選択します。

- ローカルインストールの場合、Linux 配布メディアをサーバーの CD/DVD ドライブに挿入し、デバイスのリストから選択し、Enter を押します。

- リモートインストールの場合、クライアントのリモートでマウントされた仮想 CD/DVD ドライブを選択し、Enter を押します。

制御がメディア上の OS インストールプログラムに移ります。

4. 論理および物理ネットワークインタフェース名を特定します。次の手順を実行します。

- a. ブートプロンプトで、**linux rescue** と入力し、Enter を押します。

「Choose a Language」画面が表示されます。

- b. 「Choose a Language」画面で、適切な言語を選択して、「OK」をクリックします。

「Keyboard Type」画面が表示されます。

- c. 「Keyboard Type」画面で、適切な構成を選択してから「OK」をクリックします。

「Setup Network」画面が表示されます。

- d. 「Setup Network」画面で、「No」をクリックします。

「Rescue」画面が表示されます。

- e. 「Rescue」画面で、「Skip」をクリックします。

ユーザーシェルが表示されます。

- f. コマンドプロンプト (#) で、すべてのネットワークインタフェースを表示するために、次のコマンドを入力して Enter を押します。

```
# ifconfig -a
```

Linux 名前付きネットワークインタフェースの出力が表示されます。

複数のネットワークインタフェースが存在して、インタフェースの出力が画面に入りきらない場合には、インタフェースごとに出力を表示できます。

- g. 各ネットワークインタフェースの出力を表示するには、コマンドプロンプトで次を入力してから Enter キーを押します。

```
# ifconfig eth#
```

ここで、*eth#* はインタフェース番号です。たとえば、次のように入力した場合:

```
# ifconfig eth0
```

eth0 の出力が表示されます。

```
eth0  Link encap:Ethernet  HWaddr 00:14:4F:8D:52:BE
      inet addr:10.182.92.196  Bcast:10.182.93.255  Mask:255.255.254.0
      inet6 addr: fe80::214:4fff:fe8d:52be/64 Scope:Link
      UP BROADCAST RUNNING MULTICAST  MTU:1500  Metric:1
      RX packets:14461296 errors:0 dropped:0 overruns:0 frame:0
      TX packets:1061312 errors:0 dropped:0 overruns:0 carrier:0
      collisions:0 txqueuelen:1000
      RX bytes:1282625453 (1.1 GiB)  TX bytes:118834056 (113.3 MiB)
      Interrupt:54 Base address:0xc000
```

- 最初の列の `eth0` エントリは、Linux 論理名付きインタフェースです。出力の最初の列は、Linux または RHEL がネットワークインタフェースに割り当てた論理名を表します。

- 第 2 列 (1 行目) の `00:14:4F:8D:52:BE` エントリは、ネットワークポートの物理 MAC アドレスを指します。

- h. あとから参照できるように、論理ネットワークインタフェース名と物理ポートの MAC アドレスを記録します。Oracle Linux または RHEL OS のインストール時にネットワークインタフェースを構成する際に、この記録を参照する必要があります。

5. 終了したら、次のコマンドを使用して、サーバーをリブートして OS インストールプログラムを再起動します。

reboot

6. 手順 2 および 3 を繰り返して、OS メディアが含まれているブートデバイスを選択します。手順 7 に進みます。
7. 使用するインタフェースのタイプによって、ブートプロンプトで次のいずれかを実行します。

- テキストモードの場合、ブートプロンプトに次のコマンドを入力します。

```
boot: linux text
```

- グラフィカルモードの場合、ブートプロンプトで Enter を押します。

8. インストールプロセスのこれ以降の手順については、『*Red Hat Enterprise Linux Installation Guide*』を参照してください。

次の手順 [40 ページの「サーバーシステムツールのインストールおよびドライバの更新」](#)

サーバーシステムツールのインストールおよびドライバの更新

これらの手順では、Oracle System Assistant またはダウンロードした OS 固有のソフトウェアパッケージに含まれているソフトウェアを使用して、サーバーシステムツールにアクセスし、システムドライバを更新する方法について説明します。

- [40 ページの「サーバーシステムツールのインストール」](#)
- [41 ページの「システムドライバの更新またはインストール」](#)

▼ サーバーシステムツールのインストール

Oracle Hardware Management Pack, LSI MegaRAID Storage Manager, MegaCLI などのサーバーシステムツールは、Oracle System Assistant ソフトウェアおよびダウンロードした Linux OS ソフトウェアパッケージに含まれています。この手順を使用して、ツールをインストールします。

1. 次のいずれかを実行します。

■ システムに Oracle System Assistant がない場合:

- a. My Oracle Support サイトから最新のサーバーシステムツールおよびドライバパッケージをダウンロードします。

詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』を参照してください。

- b. ダウンロードしたツールおよびドライバパッケージをサーバーに解凍します。

- c. 解凍されたディレクトリファイルシステム内で、Linux OS Tools フォルダに移動します。

`Linux/OS_name/version/Tools/tool`

ここで、*OS_name* は、インストールされた OS (OL (Oracle Linux)、RHEL (Red Hat)、SLES (SUSE) など) で、*version* は、インストールされた Linux OS のバージョンで、*tool* は、ツール (MSM、MegaCLI、hmp-tools など) です。

■ システムに Oracle System Assistant がある場合:

- a. OS 内でファイルブラウザを開き、Oracle System Assistant の USB デバイスに移動します。

USB デバイスの名前: ORACLE_SSM

- b. 次のパス構造を使用して、適切な Linux OS Tools フォルダに移動します。

`Linux/OS_name/version/Tools/tool`

ここで、*OS_name* は、インストールされた OS (OL (Oracle Linux)、RHEL (Red Hat)、または SLES (SUSE)) で、*version* は、インストールされた Linux OS のバージョン、*tool* は、ツール (MSM、MegaCLI、または hmp-tools) です。

2. ソフトウェアツールをインストールするには、ツールのディレクトリにある `.txt` ファイルを参照してください。

詳細については、次のドキュメントを参照してください。

- Oracle Hardware Management Pack の場合は、<http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=ohmp> を参照してください。
- LSI MSM および MegaCLI の場合は、http://www.lsi.com/sep/Pages/oracle/sg_x_sas6-r-rem-z.aspx を参照してください。

▼ システムドライバの更新またはインストール

Oracle System Assistant は、OS のインストールプロセス中に、サポートされているほとんどのドライバをインストールします。OS のインストール後に個々のドライバをインストールまたは更新する、またはすべてのドライバを更新するには、`.rpm` ファイルまたは Linux OS InstallPack アプリケーションをそれぞれ使用します。InstallPack アプリケーションおよび `.rpm` ファイルは、USB ドライブ上の Oracle System Assistant ソフトウェアおよびダウンロードした OS 固有のソフトウェアパッケージに含まれています。

1. 次のいずれかを実行します。

- システムに Oracle System Assistant がある場合:

- a. OS から、Oracle System Assistant の USB デバイスに移動します。

USB デバイスの名前: `ORACLE_SSM`

- b. 次のパス構造を使用して、適切な Linux OS フォルダに移動します。

`Linux/OS_name/version`

ここで、*OS_name* は、インストールされた OS (OL (Oracle Linux)、RHEL (Red Hat)、または SLES (SUSE))、*version* は、インストールされた Linux OS のバージョンです。

■ システムに Oracle System Assistant がない場合:

- a. My Oracle Support サイトから最新のサーバーシステムツールおよびドライバパッケージをダウンロードします。

詳細については、『[Sun Server X4-8 設置ガイド](#)』を参照してください。

- b. ダウンロードしたツールおよびドライバパッケージをサーバーに解凍します。

- c. 解凍されたディレクトリファイルシステム内で、Linux OS InstallPack フォルダに移動します。

`Linux/OS_name/version/InstallPack`

ここで、*OS_name* は、インストールされた OS (OL (Oracle Linux)、RHEL (Red Hat)、または SLES (SUSE))、*version* は、インストールされた Linux OS のバージョンです。

2. 次のいずれかを実行します。

- すべてのサポートされているドライバを更新またはインストールするには、InstallPack ディレクトリに移動し、`InstallPack.py` ファイルを実行します。

`Linux/OS_name/version/InstallPack`

InstallPack アプリケーションの指示に従い、ドライバの更新を完了します。

- その他のドライバを更新またはインストールするには、ドライバディレクトリに移動し、`.rpm` ファイルをダブルクリックします。

`Linux/OS_name/version/Drivers/driver`。ここで、*driver* は、ドライバを含むディレクトリ名です。

Linux OS の新しいバージョンへの更新

次のセクションの手順を使用して、Linux OS を新しいバージョンに更新します。

- [43 ページの「Oracle Linux オペレーティングシステムバージョンの更新」](#)
- [43 ページの「SLES オペレーティングシステムバージョンの更新」](#)
- [44 ページの「RHEL オペレーティングシステムバージョンの更新」](#)

▼ Oracle Linux オペレーティングシステムバージョンの更新

始める前に サーバーに Oracle Linux がインストールされている必要があります。

- Oracle Linux オペレーティングシステムの更新方法を選択します。
 - Oracle Unbreakable Linux Network (ULN) のインストールの場合は、ローカル yum リポジトリを作成し、yum と up2date を構成して、そこから更新パッケージをインストールします。
<http://public-yum.oracle.com/> を参照してください。
 - Unbreakable Linux Network サポートなしの Oracle Linux インストールの場合は、Oracle Public yum サーバーと yum クライアントを使用して更新をインストールします。
<http://public-yum.oracle.com/> を参照してください。

注記 - この yum サーバーの使用には、いかなるサポートも提供されません。エラッタ、セキュリティパッチ、およびその他の更新が必要な場合は、<http://linux.oracle.com/> にある Oracle Unbreakable Linux Network (ULN) を使用してください。

▼ SLES オペレーティングシステムバージョンの更新

この手順では、YaST を使用して SLES を更新します。

YaST は、テキストモードとグラフィカルモードの両方で動作可能です。ここでの指示は、両方に適用されます。

始める前に Novell Customer Center のユーザー名とパスワード、および SLES 製品のアクティベーションコードを取得します。

1. スーパーユーザーとしてログインします。
2. YaST オンラインアップデートサービスを開きます。

you

YaST ユーザーウィンドウが表示されます。

3. ネットワークファイアウォールに保護されていて、インターネットにアクセスするためにプロキシサーバーを使用する必要がある場合には、正しいプロキシ情報で YaST を構成します:
 - a. 「Network Services」タブをクリックします。
 - b. 右側に表示されている「Proxy」画面をクリックします。
 - c. HTTP フィールドと HTTPS フィールドの両方に、正しいプロキシ URL を入力します。
 - d. YaST を終了します。
 - e. 次のコマンドを入力します:

```
# rug set-prefs proxy-url proxy URL
```

ここで、*proxy URL* は、プロキシサーバーの完全修飾 URL です。例:
`http:// proxy.yourdomain:3128/`
 - f. YaST を再起動します。
4. Novell Customer Center に登録するには、次の手順に従います。
 - a. 「Software」タブをクリックします。
 - b. 「Novell Customer Center Configuration」を選択し、指示に従います。
これには、Novell Customer Center のユーザー名とパスワード、および SLES 製品のアクティベーションコードが必要です。
5. ソフトウェアの更新を実行するには、「Online Update」タブを選択します。

▼ RHEL オペレーティングシステムバージョンの更新

始める前に サーバーに RHEL がインストールされている必要があります。

サーバーが Web にアクセスできる必要があります。

1. yum 更新プログラムを実行します。

```
# yum update
```
2. 質問に答えて選択内容を決定したあと、パッケージをダウンロードしてインストールします。

yum を使用して、システムを定期的に更新する必要があります。

詳細は、マニュアルページを参照してください。次のように入力します。

```
# man yum
```


索引

数字・記号

BIOS

最適なデフォルトのロード

Linux, 21

ブートモード、設定 (Linux), 22

Legacy BIOS

ブートモード

Linux, 22

Linux, 12

OS のインストールオプション, 10

Oracle ILOM

リモートコンソール

Linux, 17

Oracle Linux

バージョンの更新, 43

メディアキット, 15

Oracle System Assistant

Linux, 12

OS インストール (Linux), 25

OS のインストール

Linux, 9

Red Hat Enterprise Linux (RHEL)

バージョンの更新, 44

メディアキット, 16

SUSE Linux Enterprise Server (SLES)

バージョンの更新, 43

メディアキット, 16

UEFI (Unified Extensible Firmware Interface) BIOS

ブートモード

Linux, 22

あ

インストール

MegaCLI

Linux, 40

MegaRAID Storage Manager

Linux, 40

Oracle Hardware Management Pack

Linux, 40

ツールとドライバ

Linux, 40

リモートセットアップ

Linux, 17

ローカルセットアップ

Linux, 16

オペレーティングシステム

サポートされているバージョン

Linux, 10

バージョンの更新, 42

か

更新

OS バージョン, 42

さ

最適なデフォルト

ロード

Linux, 21

サポートされているオペレーティングシステム

Linux, 10

手動による OS インストール

Linux, 12, 29

Oracle Linux, 29

RHEL, 36

SLES, 33

た

ツールとドライバ

インストール, Linux, 40

は

補助付き OS インストール

Linux, 12, 25

ま

メディアキット、OS のインストール
Linux, 15

ら

リモートインストール
セットアップ, 17
ローカルインストール
セットアップ
Linux, 16